水星交響楽団

第59回定期演奏会

交響曲第6番

SYMPHONY NO.6

指揮　新田 ユリ

2019.5.19 ㊐　13:30 開演（13:00 開場）

すみだトリフォニーホール 大ホール

ごあいさつ

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。
3つのシンフォニー第6番が並んだ今回のプログラム、皆さまはどう感じられるでしょうか。チャイコフスキーの悲愴はあらためて説明することもない名曲です。しかしながら、シベリウスの6番は最近ようやくしばしば演奏されるようになってきましたくらいですし、いろいろと調べてみましたが、吉松隆さんの6番は、2013年の初演以来何回かしか実演されていないようです。正直いって「そう言われても聴いたこともないしよくわからない」という印象をもたれる方が多いのではと思います。

でも、演奏会が終わったあと同じ質問をさせていただけるなら、3曲には共通する何らかの「いろ」や「におい」があると気がつかれると思います。詳しくは、このあとのプログラム解説をお読みいただければと思いますが、シベリウスもチャイコフスキーも吉松さんのシンフォニーに直接引用されていますし、私たちも、練習を重ねるごと、3曲に通底する「何か素晴らしいもの」の存在を感じてきました。あいまいな言い方になって申し訳ありませんが、皆さまにもぜひその「何か」を共有いただければと団員一同願ってやみません。

また今回は、新田ユリさんに初めて指揮をお願いしました。皆さまご存知のとおり、新田さんは、日本シベリウス協会の会長を務められるほか、特に北欧の作曲家のご紹介に力をいれておられ、今回のプログラムをお願いするには最も相応しいと考え、指揮をお願いしました。新田さんの鮮やかなタクトで水響の新しい一面を見て頂ければと思います。

それではごゆっくりとお楽しみください。

水星交響楽団　運営委員長　植松 隆治

本日のプログラム

ジャン・シベリウス　交響曲第6番 ニ短調 作品104（約30分）

第1楽章　Allegro molto moderato
第2楽章　Allegretto moderato – Poco con moto
第3楽章　Poco vivace
第4楽章　Allegro molto – Doppio più lento

吉松 隆　交響曲第6番「鳥と天使たち」作品113（約25分）

第1楽章　右方の鳥(Bird in Right)
第2楽章　忘れっぽい天使たち(Forgetful Angels)
第3楽章　左方の鳥(Bird in Left)

休　憩（15分）

ピョートル・チャイコフスキー　交響曲第6番「悲愴」ロ短調 作品74（約45分）

第1楽章　Adagio – Allegro non troppo
第2楽章　Allegro con grazia
第3楽章　Allegro molto vivace
第4楽章　Adagio lamentoso – Andante – Andante non tanto

PROFILE

水星交響楽団

水星交響楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。都内の主要ホール等で、定期演奏会を年2回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。

指 揮
新田 ユリ

国立音楽大学卒業後、桐朋学園大学ディプロマコース指揮科に進む。指揮を尾高忠明、小澤征爾、秋山和慶、小松一彦各氏に師事。1990年第40回ブザンソン国際青年指揮者コンクールファイナリスト。

1991年東京国際音楽コンクール指揮部門第2位。1991年に東京交響楽団を指揮してデビュー。その後も国内主要オーケストラへ客演。東京佼成ウィンドオーケストラ、大阪市音楽団と共演、録音、またシエナ・ウィンド・オーケストラ、東京吹奏楽団にも客演。オペラでは、横浜シティオペラ、大田区民オペラ協議会でモーツァルトの5大オペラ、「夕鶴」などを指揮。

2000年10月～ 2001年10月、文化庁芸術家在外研修員としてフィンランドに派遣され、音楽監督オスモ･ヴァンスカ氏のもとラハティ交響楽団で研修。フィンランド国立歌劇場とサヴォンリンナ音楽祭においても、オスモ･ヴァンスカ氏のアシスタントを務める。これまでにクオピオ交響楽団、ミッケリ市管弦楽団、ヨエンスー市管弦楽団、フィンランド海軍吹奏楽団、フィンランド国防軍吹奏楽団、ラ・テンペスタ、クリスチャンサン交響楽団などフィンランドはじめ北欧諸国へ客演を続けている。

2005年～2007年、オウルンサロ音楽祭へ招聘、2006年、2013年リエクサ・ブラスウィーク客演。

2017年10月には南デンマークフィルハーモニーに客演。日本デンマーク修交150年記念定期公演においてオールデンマークプログラムを指揮。

2005年9月にフィンランド日本友好協会よりラムステッド基金奨学金を授与される。

2006年、2007年には東京新聞フォーラム「指揮者がみたフィンランド」にて講演と演奏のプロデュース・指揮を務めた。2007年4月より2009年3月まで中日新聞「エンタ目」に月1 度コラムを執筆。

2008年6月、2010年7月にＮＨＫ「名曲探偵アマデウス」に出演。シベリウスの「フィンランディア」、「交響曲第2 番」を特集した番組の解説を務める。

日本シベリウス協会会長。国立音楽大学、桐朋学園大学、相愛大学などで後進の指導に当たっている。

2015年1月より、一般社団法人愛知室内オーケストラ常任指揮者。

チラシに記載の暗号（16　1　21）の答え合わせ

まずそれぞれに6を掛けます。
16×6＝96　1×6＝6　21×6＝126
で、今回演奏する3曲の初演された年は、シベリウス交響曲第6番「1923年＝96年前」、吉松隆交響曲第6番「2013年＝6年前」、チャイコフスキー交響曲第6番「1893年＝126年前」なのです。何たる偶然！

INTERVIEW

「それぞれの曲の持つ世界を表現できるように」
── 水響初共演　指揮者　新田ユリさんに聞く ──

北欧の作曲家の作品の指揮というと真っ先に名前が挙がる新田ユリさん。是非今回のプログラムで共演をと思い、それが実現しました。新田さんに北欧の音楽との出会いや指揮者を志したきっかけ、水響との初共演に対する思いをうかがいました。

北欧の音楽との出会い

── 新田さんは日本シベリウス協会会長も務めておられ、北欧音楽に造詣の深いことで知られますが、北欧音楽との出会いはいつ頃だったんでしょうか？

父がロシア語の教師で（故東京外国語大学名誉教授 新田實氏）子どもの頃、父の仕事で北海道に住んでいたこともあり、ロシア語やロシアの音楽に囲まれていたせいか、北の音楽が好きというのが原点にありました。

その後、大学（国立音楽大学）卒業後にシベリウスを始めとする北欧の作曲家の弦楽オーケストラの曲に出会い、「こんなにも透明感のある北国の空気そのものを感じさせる音楽があるんだ。」と感激し、北欧五ヶ国の作曲家の弦楽アンサンブル曲を演奏する活動を始めました。その活動の中で、フィンランドの音楽をもっと深く勉強したいと思うようになり、文化庁の在外研修員に応募したのですが、受け入れ先を探しているとき、1999年オスモ・ヴァンスカ氏がラハティ交響楽団のシベリウス交響曲全曲演奏会で来日され、ヴァンスカ氏を訪ねて彼のもとで勉強したいとお願いしたところ、受け入れて頂き、2000年の秋から1年間、フィンランドで文化庁芸術家在外研修員として勉強しました。これをきっかけにフィンランドと日本を行ったり来たりして、今に至るまで北欧の音楽をメインに活動しています。

オーケストラ活動と指揮者への道

── 高校のオーケストラでバイオリンを弾いてらしたと伺いましたが、バイオリンは小さい頃始められたのですか？

ピアノは４歳から習っていたのですが、オーケストラの曲、中でも弦楽器の音が好きでバイオリンも習いたかったんです。入った高校にオーケストラがあり、そこで念願だったバイオリンを弾き始め、オーケストラ活動にのめりこんで行きました。

── 指揮者になろうと思ったのはどういうところからだったんですか？

本当は音楽の教師になって母校の高校に戻ろうと思っていたんです。それで大学も指揮科ではなく、音楽教育科に進んだのですが、大学の勉強とは別に、桐朋学園の系列の先生が指導くださるサークルで小松一彦先生について指揮を勉強したことと、高校のオーケストラで学生指揮者をやったことなどがリンクして、プロの指揮者になりたいと思うようになり、4年生のときに教員採用試験の受験票を破り捨て、桐朋のディプロマコースの指揮科に入って専門に勉強したので、スタートは遅いんですよ。

アマチュアオーケストラとの共演、水響の印象

── 愛知室内オーケストラはじめプロのオーケストラも数多く指揮されていますが、アマチュアオーケストラとも多く共演されています。プロとアマチュアとではアプローチの仕方が異なると思いますが、アマチュアオーケストラを指揮するときに考えていらっしゃるのはどんなことですか？

アマチュアの場合、その楽団がやりたいことをやれるというのが一番大切で、それが出来ないと楽しみでやっていることがちっとも楽しくなくなってしまいます。楽団によってカラーがあり、そのカラーの中でこの曲をやりたい、そのためにプロとしてどう道を作るかということを考えて接しています。

── 今回水響とは初共演ですが、どんな印象をお持ちですか？そして、今回の曲目を聞かれたときはどう思われましたか？

とてもポテンシャルが高く、一人ひとりが楽譜を見て考えていることややりたいことがたくさんあると思うんです。それがオーケストラとしての音になったとき、曲によって出てくる音の表現があまり変わらない（笑）というのが初めてお会いしたときの印象でした。ですから、曲ごとにいろいろな世界をつくれるようなお手伝いができたらと思っています。

今回の3曲をと聞いたときは、正直言ってこの3曲を一緒にやるのかと驚きました。シベリウスと吉松隆は、吉松さんがご自分でもシベリウスをとても尊敬していて影響も受けたとおっしゃっているように、音作りに共通したものがあり、一緒に演奏するのはよく分かるのですが、チャイコフスキーは全く違う音楽の世界なので、違うものを違うように表現できるような演奏に仕上げていきたいです。

── これまでは指揮者は圧倒的に男性が多かったですが、最近は女性指揮者も珍しくなくなってきました。新田さんの指揮者としてのファッションへのこだわりは？

それがあんまりこだわりがなくて（笑）肩が広いので、時々着る燕尾服も男性用を直さず着ているんですよ。

当日は、音楽も服装もビシッと決めたいと思います。

（聞き手　伊東 陽子）

PROGRAM NOTES 1

Jean Sibelius (*1865-1957*)

ジャン・シベリウス
交響曲第6番 ニ短調

フィンランドと言えば…

「フィンランド」と言って、皆さんが想像するものは、何ですか？

・森と湖の国
・サンタクロース
・ムーミン
・サウナ
・マリメッコ（ファッションブランド）
・ミカ・ハッキネン（F1レーサー）
・ヤンネ・アホネン（名前が印象的なスキージャンプ選手）
・国連「世界幸福度ランキング」2年連続第1位（2018年、2019年）
・福祉国家（でも税金も高い）
・ノキア（携帯電話メーカー）
・リナックス（コンピュータのOS）
・エア・ギター世界選手権（2006年、日本のお笑い芸人が日本人初優勝）

などなど…

ハメーンリンナ

エア・ギター

「フィンランド」とは、言うまでもなく「フィン人の国」の意味。フィン人の人口は少なく、もともといまのフィンランド南部の土地に固まって住んでいました。現在では、高福祉・高負担のいわゆる「北欧モデル」のイメージから、スウェーデン、ノルウェー、デンマークと一括りにして語られることが多いですが、これら三国の民族的源流はノルマン人つまりヴァイキングですから、フィン人とは系譜を異にしています。13世紀末以降スウェーデンの支配下にあり、次いで19世紀初頭からはナポレオン戦争の結果としてロシアに割譲されるなど、フィンランドは長らく他民族の統治の下にありました。19世紀後半、ナショナリズムの波がこの地にも押し寄せるに至って、ロシアの圧政に対する民族の不満が次第に高まり、第一次世界大戦末期の1917年、ロシア革命の混乱に乗じて独立を勝ち取ったのです。

しかしその後も、フィンランドは（ロシア帝国崩壊後の）ソ連に翻弄され続けることになります。第二次世界大戦では再びソ連の侵攻を受け、ドイツ、イタリア等枢軸国側について戦ったものの敗れ、多額の賠償金支払いを余儀なくされました。

ただ、ドイツよりも早めに休戦した（1944年）こともあって、東欧のような完全な社会主義化を免れ、スウェーデンの支援も得て、資本主義国として復興に邁進しました。その象徴がオリンピック開催（ヘルシンキオリンピック、1952年）であったことは日本ともよく似ています。1952年には賠償金を完済。引き続きスウェーデンの影響の下、フィンランドは急速に北欧流の福祉国家としての歩みを進めていきました。

1989年の冷戦終結は、ソ連の軛（くびき）からの解放と同時に、経済上の主要なパートナーの喪失も意味し、フィンランドは苦境に陥りました。しかし1995年、スウェーデンとともにEUに加盟すると、IT分野が経済を牽引し見事復活。先進国の主要な一角を占めるまでに至っていることは周知のとおりです。

シベリウスとフィンランド

そして、フィンランドと言えば、もちろん、シベリウス！

シベリウスは、1865年、ヘルシンキの100km北にあるハメーンリンナで生まれました。ヘルシンキ音楽院等で学び、1890年ごろから作曲活動を始めました。

「フィンランディア」や「交響曲第2番」をご存知の方も多いでしょう。「フィンランディア」が作曲されたのは1899年（34歳）。ロシアの下で虐げられていたフィンランド人を独立運動に向けて大いに鼓舞しました。ロシアがこの曲を演奏禁止処分にしたのは有名な話です。また「交響曲第2番」は1901年（36歳）の作曲。「シベリウスの田園交響曲」と呼ばれることもあります。北欧の森と湖、雪と針葉樹。透明で冷涼だけれども、生命の息吹や喜びをも感じさせる、シベリウスの代表作です。

ただし、シベリウスを「フィンランドの自然を歌い上げ、民族主義を高揚した国民的作曲家」とばかり捉えるのはいささか早計のようです。シベリウスはむしろ、国民から賞賛を浴びれば浴びるほど、音楽家として、民族主義を表現するためには普遍的な特性を備えていなければならず、また逆に普遍的であるためには民族的特質に基づく必要があると考えるようになっていきました*1（このあたりの考え方は伊福部昭と酷似しています*2）。国民的作曲家の名声を獲得したことがある種の通過儀礼となり、シベリウスは民族的特質を突き抜けて、普遍的な作品の創作に向かう新たなステージへ進むこととなります*3。

交響曲第6番 ニ短調

こうしてシベリウスは、交響曲第3番以降、独自の境地を切り拓いていきます。その流れを一言で言えば、簡明さを追求するということでした。よく同時代のマーラーと比較されますが、マーラーが「交響曲とは全てを包み込み、森羅万象を語るものだ」と言って、オーケストラの規模や演奏時間の途方もない拡大路線をとった*4のとは対照的に、シベリウスは「交響曲とはモティーフの論理的な統合を図り、様式美を追求するものだ」と言って、コンパクトな規模と時間の中にエッセンスをぎゅっと凝縮する純化路線をとったのです*5。

一般に、その最終到達点が交響曲第7番（1924年、59歳）であるとされています*6。単一楽章の中に起承転結が有機的に盛り込まれ、交響曲としては非常に短い（20分強）という特徴から、シベリウスの到達点と言えばこれということになっているのですが、並行して作曲された6番（1923年、58歳）も、なかなかに劣らぬ達成を示しているのではないでしょうか。演奏時間の短い4つの楽章はそれぞれ際立ったキャラクターを示しており、7番よりもむしろ簡明さを感じとれるようにも思います。

7番の陰に隠れて、6番はシベリウスの交響曲の中ではマイナーな部類に属し、派手さや、聞こえよがしに何かを主張するようなところは全くありません。しかし、筆者のこれまでの人生における勝手な判断によれば、心ある人ほど、「ひそかに、そっと、6番を愛して」います。凛とした冷たさと懐かしい温かさが不思議と融和したシベリウス的な（フィンランド的な）音世界の向こうに、（日本人の）私たちは「もののあはれ」とでも形容すべき枯れた情趣をも味わうことができ、それが古今の別も東西の別もない芸術の普遍的な高みを望むことにつながっていきます。今日演奏する私たちも、この佳品に出会い、演奏ができることに感謝し、演奏が終わった後も、胸の中で静かに慈しむように、いつまでも大切にしたいと思います。

第1楽章　Allegro molto moderato

弦楽器の透き通ったコラール*7のあとに、テンポが上がって、ハープがポロンポロンと細かい音を刻みます。吉松隆氏によると、シベリウスの6番の展開は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』のストーリーと酷似しており、このハープはジョバンニとカムパネルラが天空へと旅立つ夜汽車のリズムのように聞こえるのだそうです。

音楽は次第に森の奥深くに迷い込んでいきますが、突然ぱっと視界が開け、弦楽器、ハープ、木管楽器が憧れに満ちて飛翔します。金管楽器のファンファーレで輝かしく終わるかと思いきや、木管と弦の短く静かなリフレインが続いて、さらりと終わります。今までのできごとは何だったのだろう、すべて幻だったんだよと諭すかのように。

第2楽章　Allegretto moderato - Poco con moto

緩徐楽章に相当します。印象的なのは後半、少しテンポが上がって唐突に弦楽器がさわさわと動き始めるところです。森の葉ずれの音とも、しんしんと降る粉雪とも思えますが、急ブレーキがかかって、1楽章と同様にあっさりと終わります。

第3楽章　Poco vivace

スケルツォ楽章に相当しますが、諧謔味はなく、決然と進んでいきます。2回現れる、金管とティンパニの「決め」がかっこいいです。

第4楽章　Allegro molto – Doppio più lento

弦、木管、ホルンが、痛切なコラールと慰めるような合いの手を交代で奏した後、曲想が明るくなって快速に進みますが、1楽章と同様に次第に混迷を深めていき、突如停止します。再び夜汽車のリズムが聞こえますが徐々に消えていき、弦楽器の清冽なコラールが、一瞬こみ上げるように高揚するものの、やはりすべて幻とばかりに、虚空へと消えていきます。

（横地 篤志）

---

*1 「『民俗音楽は、芸術音楽に対して直接的な影響を与えるものではない。その意味は啓蒙的な特性にある。自国の民俗音楽を熟知している作曲家は物事を必然的に異なる視点でとらえ、別の要素を強調し、他者とは全く違った手法で自己の芸術を完成させるのである。…創作においては、特に表現手法に関して、できる限りローカルなものから自由でなければならない』」（神部智「ジャン・シベリウスの《交響曲第二番》における表現手法と作品受容」、『美學』第59巻第2号、2008年12月、p.116）

*2 「文化とか芸術は民族によって違うけれども、その民族の特殊性というものを通過して、共通の人間性に到達しなければならない。そうなったものだけが芸術として残っている」（「伊福部昭の世界～ゴジラを生んだ作曲家の軌跡」、NHK Eテレ、2014年8月）

*3 「『私の交響曲は、全く文学の要素を持たない音楽的表現である。…私の交響曲の核心は純粋に音楽的なものなのである。しかし交響詩を創作する際は、もちろん状況は異なる』」（神部智、上掲論文、p.117）

*4 その究極の形態が「交響曲第8番『千人の交響曲』」。合唱も含め、1,000人とはいかないまでも数百名に及ぶおびただしい数の奏者を要する。水響では次回、60回記念定期演奏会（本年11月4日）においてこの『千人』を演奏する。

*5 ただし、6番のスコアを見ると、個々の楽器がポリフォニックに動くとともに、音量やアーティキュレーションの指示が非常に細かく書き分けられていて、少なくとも譜づらにおいてはマーラーを彷彿とさせる部分が少なくない（その割にはミスプリントが多くて奏者に無用の混乱を惹起しているが）。

*6 シベリウスはこれ以後、1957年に91歳で亡くなるまで、30年以上、ほとんど作品を発表することなく沈黙した。
なお水響では、2013年5月の演奏会で7番を採り上げた。2003年8月には5番を演奏しており、本日は水響3回目のシベリウスとなる。

*7 本日この次に演奏される吉松隆の交響曲第6番の第2楽章で引用されているので要注目。

吉松 隆
交響曲第6番《鳥と天使たち》

吉松隆氏について

当たり前の話だが、存命中の人物について語るのは何かと難しい。普通に考えてその人物のことを本人以上に知っている者など誰もいないだろうから。特に吉松隆氏（以下敬称略）はエッセイストとしても活躍する文才豊かな人物だけあって、自らについて語った文章も豊富。知りたいことがあるなら彼のオフィシャル・ウェブ・サイトを覗いてみればよい。

ということで、「吉松隆　交響曲工房」(http://yoshim.music.coocan.jp/)と題された彼のサイトを参照の上、略歴を引用させていただく（以下、本文中のゴシック体の部分は基本的に上記のサイトからの引用）。

> 1953年（昭和28年）東京生まれ。作曲家。
>
> 慶應義塾大学工学部を中退後、一時松村禎三に師事したほかはロックやジャズのグループに参加しながら独学で作曲を学ぶ。
>
> 1981年に「朱鷺によせる哀歌」でデビュー。以後、現代のクラシック系音楽創作界（いわゆる「現代音楽」）の非音楽的な傾向に異を唱え、調性やメロディを全面的に復活させた独自かつ異端の路線を貫き、作曲活動を展開する。
>
> 作品は、交響曲6曲や協奏曲10曲を始めとするオーケストラ作品を中心に、〈鳥のシリーズ〉などの室内楽作品、〈プレイアデス舞曲集〉などのピアノ作品のほか、ギター作品、邦楽作品、舞台作品など多数。
>
> 1998年からはイギリスのシャンドス（Chandos）とレジデント・コンポーザーの契約を結び全7枚に及ぶオーケストラ作品集を録音。また、プログレッシヴ・ロックの名作「タルカス」のオーケストラアレンジ、NHK大河ドラマ「平清盛」の音楽なども担当。クラシックというジャンルを越えた幅広いファンの支持を得ている。
>
> 評論・エッセイなどの執筆活動のほか、FM音楽番組の解説者やイラストレイターとしても活動し、著書に「調性で読み解くクラシック」（ヤマハ）、自伝「作曲は鳥のごとく」（春秋社）などがある。

これで必要最小限の情報はほぼ網羅されてしまったが、ここで触れられていないものの中で今回のテーマに関わりのありそうなトピックについて、いくつか紹介させていただく。

1）作曲家を目指したきっかけ

高校受験を控えたころにレコードでベートーヴェンの交響曲第5番を聴いてクラシック音楽に興味を持ち、自分も交響曲を作曲したいという思いに駆られた。

2）シベリウス

当初好んで聴いていたのはベートーヴェンやチャイコフスキーなどだったが、高校1年生の秋にシベリウスの後期作品（特に交響曲第6番）を聴いて強い影響を受けた。

3）プログレッシヴ・ロック

大学在学中にピンク・フロイド、ELP、イエスなどに出会って心酔、自らもインストルメンタル・バンドでキーボードを弾く。曰く氏にとってのプログレとは「『クラシック・ジャズ・現代音楽・民族音楽などなどすべての音楽と合体可能な音楽思想』としての〈ロック〉を模索する壮大な志向。私が『現代音楽の風潮』と対峙して創作の基調としたのは、新ロマンでもポスト・モダンでも調性回帰でもなく、この『思想としてのロック』なのである」。

作品について

今回演奏する交響曲第6番《鳥と天使たち》について、再び公式サイトから引用させていただく。

> 私にとって「鳥」と「天使」（そして「星」）は、自分の音楽のイメージを支える重要なテーマである。「鳥」は（音楽家として人間の先輩であると同時に）空を飛びひたすら歌を囀る自由なものであり、「天使」は人間を傍観しながら透明にただ浮遊するものである。
>
> そんな2つの存在について60歳を迎えて改めて回顧したのが、夢の中に浮かぶ鳥と天使の絵が描かれた「音のおもちゃ箱」。それが今回の交響曲の最初のイメージだった。
>
> 第1楽章：右方の鳥（Bird in Right）
> 第2楽章：忘れっぽい天使たち（Forgetful Angels）
> 第3楽章：左方の鳥（Bird in Left）
>
> 楽章はコンパクトに急・緩・急の3つ。右方と左方というのは、雅楽で言う「右方の舞（高麗楽）」と「左方の舞（唐楽）」のもじり。と同時に、右の鳥は「光の」という意味の「In Light」の日本語なまり、左の鳥は日本語の「酉（とり）」に「？（さんずい）」をつけると「酒」なので、「左利き」（酒飲みの隠語）という洒落。まあ、他愛のない言葉遊びのようなものなので「ふーん」と聞き流して頂ければそれでいい。
>
> もうひとつの「忘れっぽい天使」の方は、パウル・クレーの有名なペン画。人の生き死にをコントロールするのは全能で冷酷な「神さま」だが、それに対して、人の出会いや別れを担当するのは忘れっぽくてトロい「天使」。そんなイメージがこの落書きのような絵を見ているとひしひしと感じられる。
>
> さらに、そんな「鳥と天使たち」の絵が描かれた箱（交響曲）なので、色々なものが「記憶」として雑多に紛れ込んでいる。第6番…ということでSibelius、Beethoven、Tchaikovskyは勿論（笑）、タルカスや私の旧作の幾つか、そして60年代に勉強した前衛音楽のサウンドやJAZZのリズムも走馬燈のように交叉する。
>
> タイプとしては第4番（2000）と姉妹作品で「Pastoral（田園）」的な「Toy（おもちゃ）」のシンフォニーなのだが、楽譜は鬼のような変拍子と転調が渦巻き、高度なアンサンブルの精度とテクニックが要求される。
>
> いずみシンフォニエッタの委嘱により2013年春より作曲を始めて6月に完成。同年7月13日いずみシンフォニエッタ定期演奏会にて飯森範親指揮（いずみホール）で初演。op.113。

これで作品の全体像を俯瞰できたと思われるので、以下、細部について補足しつつ、各楽章について紹介していこう。

まずは彼にとっての交響曲とは何か。曰く「言葉を使わず〈音〉だけで、高尚なもの、甘美なもの、難解なもの、言葉にできないような感情、矛盾する気持ち、などすべてを投入できる〈究極のメディア〉」。その立脚点は一般的な「ソナタ形式による楽章を含む多楽章によって構成された音楽作品」といった定義とは根本的に異なっている。

次に「鳥」と「天使」について。出世作となった「朱鷺によせる哀歌」をはじめとする作品番号付きの曲のほぼ四分の一が「鳥」にちなんだタイトルを持つことからも容易に想像できるように、「鳥」は一貫して彼の創作のモティーフであり続けてきた。そもそも彼にとっての「鳥」とは「『現代音楽という不毛な

森から飛び立って、調性の空を自由に飛翔する』ということのメタファー（隠喩）」であり、彼の作曲スタイルの端的な表明としての意味も持つ。

もう一方の「天使」について。このタイトルは実は今回が初出ではない。本格デビュー前の1970年代末時点でこのタイトルを持つ連作がハーモニカ奏者崎元譲のために書かれているのである。音楽的なつながりの有無は別として、そこに回顧的な意味合いが込められている可能性は多分に存在する。

第1楽章「右方の鳥」

大きく分けて「序奏」、「テーマ」、「ワルツ」、「長めの経過部」、「プログレ／ジャズ／前衛」、「テーマの再現」の6つの部分から成り、特に脈絡を持たないまま次々と場面が転換していくアレグロ楽章。形式感は判然としないが、これは先に触れたように「交響曲」の定義そのものが一般的なそれとは異なることも関係するだろう。

「序奏」には、木管楽器とピアノなどによる「鳥の囀り」と、弦楽合奏による「嘆きのうた」の2つの要素が登場。これらを構成するニ調のエオリア旋法ないしドリア旋法のモード感が作品全体を貫く主モードとなっている。

「テーマ」ではプログレッシヴ・ロック的な変拍子によるグルーヴ（8分の3+3+3+2拍子+8分の3+3+2拍子）に乗って、序奏冒頭の「囀り」がクール・ジャズ風なメロディへと成長していく。

続く「ワルツ」では、典型的な3拍子から次第に5拍子へと変容していく中で、重音が印象的なヴァイオリン・ソロから始まるフレーズがカノン風に処理される。なお、この部分には自身の交響曲第4番やプレイアデス舞曲集からの引用を聞き取ることができる。

「経過部」は静謐な音楽からスタートするが、次第に全音音階的なフレーズが支配的になっていく。その過程で聞かれる前衛由来の弦楽器の特殊奏法とハイハット・シンバルの刻むリズムは次の部分の先触れである。

「プログレ／ジャズ／前衛」では16ビートのリズムに乗って金管楽器がブラス・ロック風のメロディを奏でる。ルトスワフスキの「管理された偶然性」の手法でクライマックスを築くと、勢いを保ったまま音楽は次第に静まっていく。

「テーマの再現」はソナタ形式の再現部というよりは少し長めのコーダといった趣きで、音楽は突然途切れるように終わる。

第2楽章「忘れっぽい天使たち」

木管楽器がカデンツァを歌い継ぐ部分と、ワルツ的な部分の2つの要素が交替で現れる緩徐楽章。2回目に登場するワルツの後半から、シベリウス（第1楽章序奏）、ショスタコーヴィチ（第1楽章第2主題の断片）、チャイコフスキー（フィナーレ冒頭）の順番で彼が影響を受けた作曲家の交響曲「第6番」からの引用が聞こえてくる。

「忘れっぽい」という言葉とは裏腹に、木管楽器奏者が持ち替えるオカリナ、トイ・ピアノ、オモチャのような音を立てる打楽器などノスタルジックな感情を刺激する響きに満ちているほか、上記の引用が氏の音楽観を形作った作品からなされていることも、反語的に「思い出」こそがこの曲のキーワードであることを照射しているように思われる。

第3楽章「左方の鳥」

一転、典型的な交響曲の「ロンド・フィナーレ」を模した終楽章。ロンド主部は5拍子にまで拡張されるタランテラのリズムによる無窮動風のフレーズ（ピアノ協奏曲《メモ・フローラ》の終楽章とも共通）と、これに乗って歌われる伸びやかなうたの2つの要素から成る。

最初のエピソードは自作の「サイバーバード協奏曲（サクソフォン協奏曲）」の引用からスタートし、第1楽章の「プログレ／ジャズ／前衛」のメロディの発展形に引き継がれるが、ほどなくタランテラがこれを侵食し始め、いつの間にか主部へと回帰する。第2のエピソードはベートーヴェンの交響曲第6番からの引用（第1楽章第1主題）だが、これも直ちに主部へと回収されていく。

全オーケストラによる壮大なコラールで頂点に到達するが、最後もタランテラに収束して全曲を閉じる。

吉松における「日本的ロマンティシズム」の展開

さて、前回の三善晃「交響三章」の曲目解説の中で残しておいた「日本的ロマンティシズム」というテーマは吉松においてどのような展開を見せるか、という問いに答えてみたい。

三善の「日本的ロマンティシズム」とは、フランス留学を経て物心つく前から体に染み付いた西洋音楽のアカデミックな語法自体に違和感を覚えるようになった彼が、そこに起因する創作上の困難に対処するために「依拠すべきもの」として掲げられた。それは自身のアイデンティティに直接関わる問題であり、拠って立つべき何らかの普遍性が求められていたと考えるべきであろう。

これに対し、吉松にとっての「音楽」は思春期のある時期に「発見」されたものである。「発見」の時点で受容可能なあらゆる語法（クラシック、前衛、プログレ、など）をすべて等価値なものとして受容したことから生じたキメラ状の語法とアイデンティティは、西洋音楽のアカデミズムを絶対の規範とする三善の問題意識を初手から無効化しているように思われる。さらに、吉松は三善の仕事の延長上に現れるアカデミックな「現代音楽」を絶対の規範とするような傾向に対して一貫して違和感を表明しているが、その姿勢は「規範言語によらない土着言語による表現」という原義において紛れもなく「ロマン主義」的であろう。

ただし、そこにあるのは優れて吉松の「個人的な事情と選好と経験」に基づく「ロマン主義」である。「日本的なロマンティシズム」に自らの拠って立つ普遍性を求めた三善の問いは、まだ十全な回答を得られていないのかもしれない。

（櫻井 統）

PROGRAM NOTES 3

Pyotr Ilyich Tchaikovsky (*1840-1893*)

ピョートル・チャイコフスキー
交響曲第6番「悲愴」ロ短調

「交響曲第6番」プログラムの最後を飾るにふさわしいのは、やはりチャイコフスキーの「悲愴」でしょう。古今東西の交響曲第6番のなかでは、最も人気のあるもののひとつではないでしょうか（有名度でいえばベートーヴェンの「田園」に軍配があがるでしょうか…個人的な好みを言えばマーラーの「悲劇的」も捨てがたいですが）。

水響でこの曲をとりあげるのは2回目だそうで、調べてみると1回目の演奏は1991年9月に行われた第13回定期演奏会でした（私は当時3歳！）。パンフレットを覗いてみると今でもバリバリご活躍中の先輩方のお名前を発見し、歴史の長さを感じました。

さて、チャイコフスキーの6曲ある交響曲のなかでも、最後の交響曲である第6番はとりわけ人気の高い作品です。「悲愴」という副題からもわかる通り、この交響曲はとにかく暗く、重たく、激しい感情に支配された音楽です。なぜ私たちはそんな救いのない音楽を聴き、演奏するのでしょうか。その魅力に迫ってゆきましょう。

チャイコフスキーについて——人と作品

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーは1840年5月7日、ウラル地方のヴォトキンスクで、ロシア人の鉱山技師の男性と、フランス系の移民の血を引く女性の間に生まれました。この夫婦が音楽好きだったこともあり、ピョートルは5歳の頃から家庭教師にピアノを習うようになります。8歳のとき、父親の転勤でペテルブルグに移転。

1850年、父の意志を汲んで、法律学校に入学。1859年、学校卒業とともに、法務省に勤務します。しかし、音楽への情熱を断つことはできず、1962年、知人の紹介でロシア音楽協会の音楽学校(現在のペテルブルグ音楽院)に入り本格的に音楽の勉強を始めます。翌年には法務省を辞め、音楽に専念することになります。チャイコフスキーは大作曲家にしては珍しく一般教育を受けたのちに音楽教育を受けており、そのため音楽家としてのスタートは非常に遅いものとなりました。

ペテルブルグ音楽院卒業後は、アントン・ルビンシテイン（作曲家・ピアニスト）が開いたモスクワ音楽院の教授に就任します。1866年に最初の交響曲「冬の日の幻想」を完成。この時期には歌手のアルトーと婚約まで至るものの、結局破局してしまいます。75年の34歳の時には有名な「ピアノ協奏曲第1番」を作曲し、好評を博します。

77年、かつての教え子ミリュコーヴァと結婚したものの、2か月後には神経を病みモスクワ川に入水自殺を試みています。この結婚は彼の同性愛をカモフラージュするためのものだったという説もあります。この年、チャイコフスキーの熱烈なファンである大富豪の未亡人フォン・メックから資金援助を申し出られます。この2人は頻繁に手紙を交わしましたが、実際に会うことはない関係が14年間続きました。この時期はバレエ「白鳥の湖」（1876年）や、交響曲第4番、ヴァイオリン協奏曲（ともに1878年）などの名作を次々と発表し、名声を確立していきます。

85年にはロシア音楽協会の理事となり、また指揮活動も積極的に行います。90年にはメック夫人からの援助が打ち切られ、精神的に大きなショックを受けたようです。1892年にクリンの静かな森の中に居を構え、交響曲第6番「悲愴」もここで作曲されました。1893年10月28日に「悲愴」が初演されますが、その9日後に53歳で急死してしまいます。死因は諸説あり、ある貴族の甥との関係が発覚して自殺を強要された説もありましたが、現在はコレラによるものとされています。葬儀は国葬となり、多くの人が別れを惜しみました。

チャイコフスキー晩年に住んだクリンの邸宅。現在は博物館になっている。

「悲愴」という副題

作曲者はこの交響曲について、甥のダヴィドフにあててこう手紙を書いています。

「旅の途中で新しい交響曲の構想が心に浮かんだ。今度の交響曲には標題性があるが、それは誰にも謎であるべきもので、想像できる人に想像させよう。この標題性はまったく主観的なものだ。私は旅行中に頭の中でこれを作曲しながら幾度となく泣いた。」

この交響曲は人生への恐怖、絶望、敗北など、すべて人生を肯定したり享楽したりする方向（ベートーヴェンの「第九」的なもの）とは反対方向の感情をあらわしていますが、特定の事件や特殊な個人の感情などを描写しているわけではなく、人間一般のもつ悲愴の感情を抽象的に表現しているといえます。

手紙を読む限りチャイコフスキーの中では何かがあるようなのですが、邪推しても仕方がないので、それぞれが自分なりの「悲愴」を心に描いてもらえればと思います。
ちなみに日本では「悲愴」と訳されていますが、フランス語の"Pathétique"(パテティーク)の語源はギリシャ語の"Pathos"(パトス)で「情念、情熱」という意味です。ただ暗く、悲しいだけでなく、そこに熱い情動が含まれた言葉だといえます。

第1楽章　Adagio-Allegro non troppo

序奏部(Adagio)

暗い雰囲気のゆっくりした序奏部。地の底から湧き出てくるような重苦しいファゴットの旋律が、第1楽章全体を形成する重要な動機となっています(譜例1)。

【譜例1】

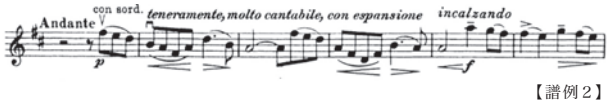
提示部

第1主題(Allegro non troppo)

第1主題は序奏の動機を速くしたもので、弦楽器からはじまり次第に複雑になりながら盛り上がっていきます。苦悩、不安、焦燥を感じさせる部分で、頂点に達すると次第に静まり、穏やかな第2主題に移ります。

第2主題(Andante–Moderato mosso–Andante)

弦楽器によるニ長調の第2主題は穏やかなもので、しばし苦悩を忘れ夢想の世界へといざなわれます(譜例2)。そこから舞踏会のようなリズムが生まれ、木管楽器がお互いの手を取り合うように歌います。第2主題は、最後にはクラリネットの独奏によって次第に小さく、彼方へと消えていきます。過去の幸せな日々への想いはいきなり断ち切られ、激しい展開部となります。(ビックリ注意！)



【譜例2】

展開部(Allegro vivo)

第1主題と第2主題を絡めながら疾走する展開部。激しい音楽ながら音色や強弱に多彩な変化がつけられているところにチャイコフスキーの技巧が光ります。一度静まったところにあらわれるトロンボーンのコラールはロシア正教会の典礼曲でパニヒーダといいます。

再現部

ホルンの3連符に乗せて第1主題が再現されますが、そこから発展し第1楽章全体のクライマックスとも呼べる部分に到達します。第2主題の再現(Andante come prima)はロ長調。長調でありながら悲哀を感じさせ、クラリネットの独奏で消えてゆきます。

コーダ(Andante mosso)

弦楽器のピチカートに乗せて管楽器の静かなコラール。もはや感情的ではなく、諦めを感じさせるようです。

第2楽章　Allegro con grazia

優雅で穏やかなワルツ風の楽章。5拍子というのは日本人にはあまり馴染みがありませんが、スラブ系の音楽・民謡にはよく出てくるようです。そうは言っても「2拍子＋3拍子」という混合拍子はぎこちない印象を受け、薄雲のかかったような不安が楽章全体を支配します。

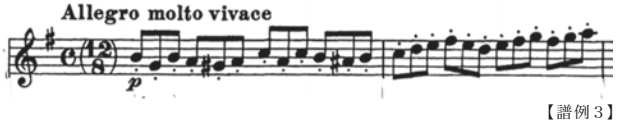
主部ははじめチェロが旋律を担当し、弦楽器全体へ、そして木管楽器へと受け継がれます。

中間部はロ短調で暗い雰囲気となり、ヴァイオリンを中心に起伏の少ない旋律を奏でます。ここではティンパニとコントラバスが「レ(D)音」を心臓の鼓動のように打ち続けており、これもやはり不安を掻き立てます。

再現部はオーケストレーションが異なるものの、主部を繰り返して終わります。

第3楽章　Allegro molto vivace

スケルツォと行進曲が混ぜ合わさった楽章。スケルツォ主題は1拍を3つに割って8分の12拍子となります(譜例3)。この主題は「タランテラ主題」とも呼ばれ、チャイコフスキーも旅行していたイタリア南部の民族舞踏に酷似しています。このスケルツォ主題がすすむ間に4拍子の行進曲が断片的に重なり、立体的なリズムを生み出します(行進曲の付点リズムが8分の12拍子のスケルツォと微妙にずれる)。



【譜例3】

この楽章は表面的には明るく快活で、楽しい雰囲気がありますが、そこには人間を反抗の戦へと駆り立てる、冷酷な力が内在しています。どんなにつらくても前に進まなくてはならない、戦わなくてはならない…。そんな心の内を想像すると、この3楽章もやはり「悲愴」なのだと気づかされます。

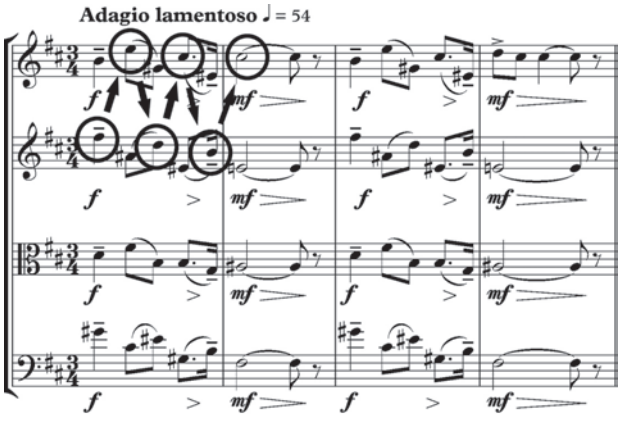
(どんなに盛り上がってもまだ拍手は我慢してくださいね！)

第4楽章　Adagio lamentoso –Andante–Andante non tanto

一般的に、交響曲の終曲というのは明るく、テンポが速く、壮大な楽章であることが多いのですが、「悲愴」のフィナーレはそれ正反対な、きわめて重く暗い楽章です。今でこそ同じような構成もつ交響曲はいくつか見られますが(マーラーの交響曲第9番など)、当時はじめて聴いた人々にとっては衝撃だったでしょう。

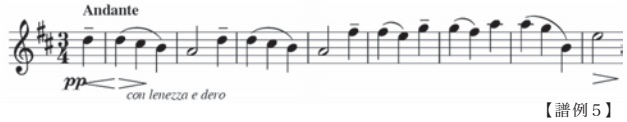
曲の冒頭は弦楽器の各パートにジグザグしたラインが書かれていますが(譜例4)、これを合わせると実に美しい、「F#-E-D-C#-H-C#」という滑らかな旋律が浮かび上がってきます。これはヴァイオリンを両翼に配置した場合、旋律が左右交互に聴こえてくるというステレオ効果を狙ったものと考えられますが、さらに付け加えるならば、旋律を1パートだけで担当

しないことで、感傷的になりすぎず、ある意味で空虚な響きが生まれているのではないかと感じます。



【譜例4】

この主題が二度繰り返され、ファゴットが低く下降していくと、中間部(Andante)となりホルンのリズムに導かれて2つ目の主題があらわれます(譜例5)。この中間部はニ長調となり、少し暖かさは感じるものの、もやのかかった薄明のような雰囲気です。この第2主題を4回繰り返すのですが、次第に激しく、苦悶の表情があらわになり、強力な下降音形をもってこの中間部を終えます。



【譜例5】

再現部となり、冒頭の主題が戻ってきますが、ここでは例のジグザグの旋律ではなく、第1ヴァイオリンよって主旋律が力強く演奏されます。悲しみの感情がもっとも強く解放されるのがこの再現部で、一番「泣ける」場所です。タムタム(銅鑼)が静かに鳴らされ、その余韻の上にトロンボーンとチューバによるコラールが響きます。絶望、諦念…。そして終結部はコントラバスによる静かな拍動のなかで、深く、深く沈んでゆきます。

「悲愴」との出会い

私は2007年に(この水響の母体でもある)一橋大学管弦楽団にファゴットで入団しましたが、1年生の最初の演奏会のメインプログラムがこの「悲愴」でした。もちろんいきなりメイン曲に乗せてもらえる訳ではないので、先輩方が演奏しているこの曲を強いあこがれをもって聴いていたことを覚えています。当時あまりクラシック音楽を知らなかった私でも、この曲の持つエネルギーには圧倒されました。

それから干支が一周し、元号がかわり、ようやく「悲愴」の1番ファゴットを演奏する機会がやってきました。とにかくこの曲は、冒頭のソロが半端なく緊張します。簡単そうに見えるのですが、ピアニッシモで小さく演奏するときに少しでも気が緩むと音が途切れてしまうため、集中力が必要です。変に気負うのもよくないのですが、せっかくなので注目していただけると幸いです。

他に「悲愴」の好きなところといえば、1楽章で2度出てくるクラリネットのソロです。クラリネットとファゴットは相棒のような所があるのですが、暗いファゴットに対して明るいクラリネットの旋律は本当に美しいです。小さい音も自在に操れるので、羨ましいです(笑)。あとは4楽章の最後に出てくるトロンボーンとチューバのコラールも好きです。上の解説には絶望と書きましたが、救いの旋律でもあるのかな、と個人的には思っています。

私たちは幸せになりたいと思いつつも、どういうわけか悲しい物語に惹かれ、涙を流したがります。その理由は人によって様々でしょう。ある人は日常のなかで言語化できない複雑な感情を作品のなかで発散させるのでしょうし、ある人は虚構のなかで思いっきり悲しむことで、日常の何気ない幸せに気付くのでしょう。本日はコンサートホールという非日常空間のなかで、ぜひ思いっきり悲しんでみてください。この演奏が終わったとき、皆さんの中に新しい何かが生まれていることを願います。

（金谷 蔵人）

水星交響楽団

◆常任指揮者
齊藤 栄一

◆コンサートミストレス
亀井 亮子

◆ファーストヴァイオリン
石川 貴隆
伊東 陽子
大西 彩加
織井 奈津乃
◎亀井 亮子
川原 ひかり
國宗 洋子
坂口 弘樹
鈴木 牧
土屋 和隆
永井 翠
前田 啓
宮川 妙子
宮川 雅裕
米嶋 龍昌

◆セカンドヴァイオリン
遠藤 颯
大西 一恵
岡村 昂洸
黒川 夏実
小林 美佳
砂川 湧
滝澤 蘭
徳地 伸保
西沢 洋
原藤 結香
堀田 淳子
前澤 郁弥
三浦 佳華
◎森 勇人

◆ヴィオラ
秋枝 美咲
井上 拓
長田 玲子
川俣 英男
木村 納
◎古宇田 凱
鈴木 尚志
戸田 彩織
松本 祥世
三上 さやか
水上 久美
山口 実

◆チェロ
東 杏子
大久保 雅子
金田 千畝
北岡 正英
◎首藤 ひかり
橋 温子
中山 憲一
日吉 実緒
能岡 雅人

◆コントラバス
◎石附 鈴之介
大西 功
刈田 淳司
小島 辰仁
櫻井 望
田中 文彬
野村 美里
山六 真由

◆フルート
神山 真美
中澤 高師
◎本田 洋二

◆オーボエ
菅野 勇斗
黒川 達郎
◎齋藤 暁彦
野口 秀樹

◆クラリネット
清水 樹土
◎藤原 誠明
前中 悠輔
山岸 雄作
横地 篤志

◆ファゴット
伊藤 綾香
小田中 優介
金谷 蔵人
◎冨井 一夫
福島 知浩

◆ホルン
伊集院 正宗
大高 直哉
岡本 真哉
◎島 啓
山崎 智哉
山城 晴香

◆トランペット
淺田 健二
家田 恭介
◎岩瀬 世彦
金子 恭江
神山 優美

◆トロンボーン
石井 志歩
櫻井 統
佐々木 英王
◎佐藤 幸宏

◆テューバ
植松 隆治

◆パーカッション
石川 誠
上田 祥太朗
岸 敦子
芹澤 美津穂
高橋 淳
◎椿 康太郎
山本 勲

◆ハープ
東森 真紀子

◆ピアノ
山形 リサ

◎＝パートトップ

今回お世話になったトレーナーの皆さま

草川 正憲
榊 真由
佐藤 雄一
鈴木 睦
髙山 健児
林 憲秀
古野 淳
三橋 敦
柳澤 崇史
山田 裕治

水星交響楽団運営委員会

運営委員長：植松 隆治
コンサートミストレス：亀井 亮子
弦インスペクター：川俣 英男、刈田 淳司
木管インスペクター：横地 篤志
金管インスペクター：佐藤 幸宏
打楽器インスペクター：山本 勲
総務：伊東 陽子
ステージ・マネージャー：櫻井 統
会計：金子 恭江、黒川 夏実
楽譜：伊集院 正宗、野口 秀樹、宮川 雅裕
運搬：刈田 淳司
会場：横地 篤志
広報・受付：岡本 真哉、鈴木 海里
鈴木 牧、東海林 拓人、土屋 和隆
レセプション：織井 奈津乃、永井 翠
インシュペクター：椿 康太郎、永井 翠
チラシ・プログラムデザイン：水本 紗恵子

次回演奏会

2019
11/4（月・祝）
14:00 開演
（13:30 開場）
すみだ
トリフォニーホール
大ホール
全席指定
S 席 ¥3,000
A 席 ¥2,500

水星交響楽団 第 60 回定期演奏会

齊藤 栄一（指揮）、國光 ともこ、朴 瑛実、高橋 美咲、加納 悦子、中島 郁子
松原 陸、藪内 俊弥、成田 眞（以上独唱）、東京オラトリオ研究会、立川コーラス・アカデミー、新星合唱団、コーラス・アカデミー JAPAN、オルフ祝祭合唱団（以上合唱）、オーケストラとうたう杜の歌・こども合唱団、四街道少年少女合唱団、FCT 郡山少年少女合唱団（以上児童合唱） ほか

◇マーラー　交響曲第 8 番 変ホ長調「千人の交響曲」

水星交響楽団 HP　https://www.suikyo.jp
問い合わせ　info@suikyo.jp / 090-1608-5749（植松）

2019
7/5（金）
19:00 開演
（18:30 開場）
すみだ
トリフォニーホール
大ホール
全席指定
S 席 ¥1,000
A 席 ¥500

一橋大学管弦楽団 Summer Concert 2019

松岡 究（指揮）

◇サン＝サーンス　交響詩「死の舞踏」
◇リスト　交響詩「レ・プレリュード」
◇シベリウス　交響曲第 1 番 ホ短調 作品 39

一橋大学管弦楽団 HP　http://jfn.josuikai.net/orchestra/
問い合わせ　info.hit.concert@gmail.com